
ラセッタの動物たち 空を見るルサン

あしか

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ラセッタの動物たち 空を見るルサン

【Zコード】

Z0405B

【作者名】

あしか

【あらすじ】

私が初めてルサンという老いたオランウータンと出会ったのは、手紙を書くためだった。

空を見るルサン

私が初めてルサンとついたオランウータンと出会ったのは、手紙を書くためだった。

もつともそれは私の手紙ではなくて、あるちこなつわざの女子に頼まれてのことだった。

というとなく深い事情があるように聞こえるけれど、ちいさな女の子が友達に簡単な手紙をだす、とただそれだけのことで、私はそのルサンというオランウータンに一度会いたいと思つていたから、そのついでに頼んできてあげることにした。

おつと、そのまえにひとつ、書いておかなければならぬことがある。

ルサンはここにセッタで、文字を書くことのできる唯一の動物だ。

だからセッタの誰かがなにか文字を書くこと思つたなら、必ずこのルサンに代筆してもらわなければならなかつた。

というのはみんな友達に聞いた話だ。

もちろん文字が書けるというだけで、私がルサンに会いたいと思つていたわけではない。理由はもう一つあつた。

それは、ルサンはただ文字を書けるというだけでなく、小説家でもあるらしいということだ。

らしいと言つたのは、もちろんこれも友達に聞いた話だからだ。

その話を聞いたとき、私はルサンの書いた小説を読みたいと思つたけれど、その友達を始めとして私の知り合いは誰もルサンの書いた小説を持っていなかつた。

そして私の知り合いといえば、ラセッタの動物たちのほとんどを意味した。

そんなわけで、私はルサンに会いにいくことになった。

私が地図を睨みながら丘をふたつ越えたころ、冷たい風が吹いた。風からはかすかに潮の匂いがした。

さらにもうひとつ丘を越えたころ、私はそこに木製のロッキングチェアに茶色い毛の塊が乗ついているのを発見した。

そしてもちろん、それがルサンだった。

私はすこし驚いてしまった。だつてここからはぐるつと地平線が見渡せたし、見渡すかぎり家なんてどこにもなかつたからだ。

私がすぐそばまで近づいてもルサンは気付いていないかのように、ただ空を見上げていた。本当に気付いていなかつたのかもしない。風がルサンの座つたロッキングチェアを重そうに揺らし、風からはいまだかすかに潮の匂いがした。

私が、こんにちは、と声をかけると、ルサンは思つていたよりも早く返事をしてくれた。

「こんにちは。……私になにか用事かね」とルサンは言つた。あたたかい声だった。

「手紙を書いてもらいたいんです、簡単な手紙なんですけど」と私は返事をした。

「もちろんいいとも。でも、手紙を書くのは久しぶりだから少し時間がかかつてしまふかもしね、書いておくからまた明日、もう一度きてくれるかい」とルサンは言い、私はわかりました、と返事をした。私の声は妙に冷たかった。だから私はそう言つたあとに軽く笑顔を作つてそれをごまかした。そうするとルサンは笑つてくれた。もちろんあたたかい笑顔だった。

私はルサンに手紙の内容を説明したあとに、「どに住んでるんですか、この近くではないようだけど」と言った。するとルサンは、

「ここに住んでるんだよ」と笑顔のままで言った。「家はね……

「捨ててしまつたよ、ずっとずっと昔にね」

私は、捨てた? と言おうとしてやめた、どうしてカルサンを傷つけてしまつような気がしたからだ。そしてかわりに、

「そういえば、小説家だつていうのは本当ですか? そうだとしたら、小説を読んでみたいな」と言った。できるだけあたたかい声にしようと頑張つたけれど、あまり意味はなかつた。

「小説家……うん、確かに小説家かもしれないね。でも、残念だけど君に小説を読ませてあげることはできない」とルサンは言った。私が不思議そうな顔をしていると、

「どうしてかつていうとだね、書いていないんだ、一言もね」とルサンは続けた。私はなにも言わずに言葉の続きを待つた。

「もちろん、書こうとしていないわけではないよ、ただ、考へているんだよ。最初の……言葉をね」私は続きを待つた。

「毎日考へてるよ、最初の言葉は一体なんだろう、ってね。ずっと昔から考へてる。私がまだ家に住んでいたころからね。海の近くでね、風が吹くと潮の良い匂いがしたよ。でもね、それを考へるようになつてから、捨てるようになつた。いろんなものをね。最初に捨てたのはなんだつたかな、忘れてしまつたよ。本当にいろんなものを捨ててきた。たくさんの中やペツトのオウム、家もそうだ、それに海と潮の匂いのする風。昔は妻もいてね、子供も一人いたよ。ふたりとも女の子でね、まだいさかつた。不思議なんだ、大事なものを捨てれば捨てるほどね、見つかる気がしてくるんだよ。最初の言葉がね。本もオウムも、家も海も潮の匂いのする風も、それに妻も子供も、みんな大好きだつた。本当に、大好きだつた」ルサンは空を見上げて笑つた。もちろんあたたかい笑顔だつた。

「ほら、今日はもう遅いよ、早く帰らないと夜になつてしまつからね、明日、またおいで。手紙は書いておくからね」とルサンは言った。空を見上げると、太陽は真上にあつた。

「それじゃあ、また明日きます」と私が言つて軽く手を振ると、ル

サンは言った。

「少しだけ、わかつたことがあるんだ」私は続きを待つた。

「最初の言葉はきっと、世界の始まりと終わりを繋ぐような言葉だ」とルサンは言った。声はかすかに冷たかった。

「またおいで」とルサンは言った。声はあたたかさを取り戻していた。

そして、私はそこを後にした。

家に帰ると、私に手紙を頼んだ女の子が私の家の前で待っていた。

「手紙、書いてくれた?」と女の子は言い、

「明日までに書いておいてくれるって、また明日取りにいってくるよ」と私は言った。

「ありがとう」と女の子は言った。元気な声だった。

次の日、私は約束の通り、手紙をもう一回ルサンのもとに向かった。

しかし、ルサンはもういなかつた。

そこには木製のロッキングチェアの上に、手紙が一枚とペンが一本置かれてあるだけだった。

一枚の手紙には「約束」、もう一枚の手紙には「言葉」と書かれていた。

私は少し悩んでから、「約束」と書かれた手紙をポケットにしまい、「言葉」と書かれた手紙を丁寧に開けた。中には一枚の、3セントチケットのちいさな紙が入っていた。そこにはさらにちいさな文字で、こう書かれていた。

Hello - good - bye .

私はロッキングチェアの上のペンを取り、世界の始めから、そして終わりまで。と書いて、その下に一本の線を引き、紙を戻して丁

寧に閉じ、ロッキングニアの上にベンの下にして置いた。

風は相変わらず重そうにロッキングニアを揺らし、相変わらずかすかに潮の匂いがした。どこかに海があるのだろうと思つたけれど、見渡す限り海なんてどこにも無かつた。

忘れんばのルサン

風が吹いて

いなくなつた

家に帰るともちろん女の子が私の家の前で待つていて、手紙を渡すと、

「ありがとう！」と可愛く言つた。赤い目が綺麗に光つていた。もうその手紙の返事が手紙としては絶対にこないのだと思うと、ほんの少しだけ涙がでそうになつたけれど、もちろん我慢した。

それから私はたびたびルサンのいた場所に足を運んだ。手紙はいつもそこにあつた。遠くからそれを見ていると、なんだかルサンが手紙になつてしまつたような、不思議な気持ちになつた。風からはいつもかすかに潮の匂いがした。

(後書き)

以前に公開した「ラセッタの動物たち」シリーズの短編が色々なところで好評を頂いたため、新たに新しい短編を書かせて頂きました。

拙い文章ですが、楽しんで読んで頂ければ、幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0405b/>

ラセッタの動物たち 空をみるルサン

2010年10月8日15時17分発行